

竈解体奉告祭典礼（立礼） 「竈を解体する御祭り」

- 一、齋主以下 祭員参進列立
- 一、齋主 神前に拝礼復席
- 一、被主 被詞を白す
- 一、大麻行事（神前・齋主・祭員・参拝者）
- 一、齋主 大被詞を唱う
- 一、齋主 竈解体奉告祭詞を奏す
- 一、齋主 玉串を奠す
- 一、家長 玉串を奠す
- 一、家族（参拝者）順次玉串を奠す
- 一、齋主 清祓之儀（まぶ）を祓う
- 一、齋主 神前に拝礼復席
- 一、齋主以下 祭員退下

- 参進する
- 拝礼する
- 被詞は被戸（大麻）前で奏上する
- 修祓をする 順序に注意
- 大被詞の奉唱（いのりのことばの用意）
- 警蹕あり（一人ずつとめる場合は奏上後に発声する）
- 祭員自席列拝
- 一同和之
- 一同警折
- 一同習之
- 一同習之
- 以上

○「竈解体奉告祭」の意義

家屋解体にあたり、井戸の神様は水神であり、竈の神様は火神である。今回の場合だと、竈のみを解体するということで、「まぶ」は残すとのことである。よって、本典礼の如きとした。なお、御社に奉斎するのは本教の懐中御神号であり、この御神号には天照大御神、八百萬神、教祖宗忠神の御神名があり、このうちの「八百萬神」の一柱である加具土神の神を拜むことよって、祭儀を執り行う。神社神道ではひもろぎを差し立てて降神・昇神の儀を行うが、ここが本教との違いである。

○神具

- ・懐中御神号
- ・御社（御神号奉斎用）
- ・三段案
- ・菰
- ・神立て
- ・神（御神前用）
- ・五色幟並びに幟立て（必要な場合）
- ・壁代（かべしろ、必要な場合。齋場が狭い時は不要）
- ・三方（六台、献饌用五台 玉串用一台）
- ・大麻
- ・献饌物（各種）
- ・玉串（必要数要確認）
- ・玉串案
- ・塩水（まぶ）を祓う際に用いる。塩は食塩を用いず、水は教会所において御祈念を込めた御神水を用いること
- ・祈りのことば（家族、参拝者用）

○神前の配置

本典礼では、竈の前に三段案をしつらえ、最上位に御社を設け、その左右に神立てを配し、二段目に①御酒御饌（中央）②鏡餅（左側）③鯛（するめでもよい。右側）を献饌し、三段目に④乾物（または野菜・果物。左側）⑤塩水（菓子でもよい。その場合は塩水を御酒御饌と同じ三方に備える。右側）とする。三段案の下には菰を敷き、神前背後には壁代で幕を引く。三段案の左右には当然、五色幟と三種の神器を設える。続いて被戸を設える。ここには当然、玉串も弁備する。ただし、竈のある場所ほどの家庭でも狭い場所であることが予想されるので、最も広い台所などを齋場とするなど、適宜、臨機応変に齋場設置を心がけること。

○備考

被主の「被詞」は通常の教会所祭典などで用いるものを「今日の○○祭仕え奉る」の箇所を「今日の竈解体奉告祭仕え奉る」に変えるとよい。「まぶ」を祓う際に用いる塩水は、被戸に弁備する。したがって被戸案には①大麻②塩水③玉串案の三方が弁備されることとなる。本教において「切麻」は地鎮祭の四方被いの儀などで用いられるが、屋内の竈の有る場所切麻を用いた場合、のちのちの便宜も考慮にいれ、塩と水で被い清めるとする。

なお、このお宅が御神前をお祀りしてある場合は、その御神前で祭儀を執り行い、清祓之儀をする時のみ、竈の前に行き、修祓を行うというようにしてもよい。

以上

※「まぶ」水を引き入れる所謂水路。

○竈解体奉告祭詞

此の「地名・名称」「○○家」を仮の齋庭と被い清めて
坐せ奉り齋き奉る

掛巻も綾に畏き天照大御神の大御前及八百萬神等教
祖宗忠大神の大前 また此地をうしはぐ大地主大神
火具土神の大前を拝み奉りて 「職姓名」畏み畏みも
白さく

此の「○○家」を時永く守護給い鎮まり坐す此の竈は
しも 此度事理由ありて解くこととなり計画なすこ
とにしあれば 大舟の思いをいたして 嚴の広庭を
打ち固めて 八十日は多にあれども 今日を生日の
足日と齋き定め 土曳き均し起工めて「○○家」の竈
を解き奉らんとす 此斯申す状を聞召し相諾い給いて
障ることなく過つことなく 法則の随に工事は弥進
みに進めしめ給いて 嚴しく美しく造成終えしめ給
へと事の由を聞こえ上げ奉らくをさやかに 平けく
安らけく聞召し諾い給い 永き年月の程此の竈を守
り給いし大神には その御神徳を被り奉りし日々に
感謝の真心を捧げつつ今日より後は天の元津御座に
安く平穩に還り鎮まり坐せ 安く平穩に還り鎮ま
り坐せと畏み畏みも白す(警畢)

※「竈」は、おくだの神様などという呼称もあり、地
域により名称も様々であるが、適宜祝詞中に挿入し
てもよい。